

妖婆 死棺の呪い

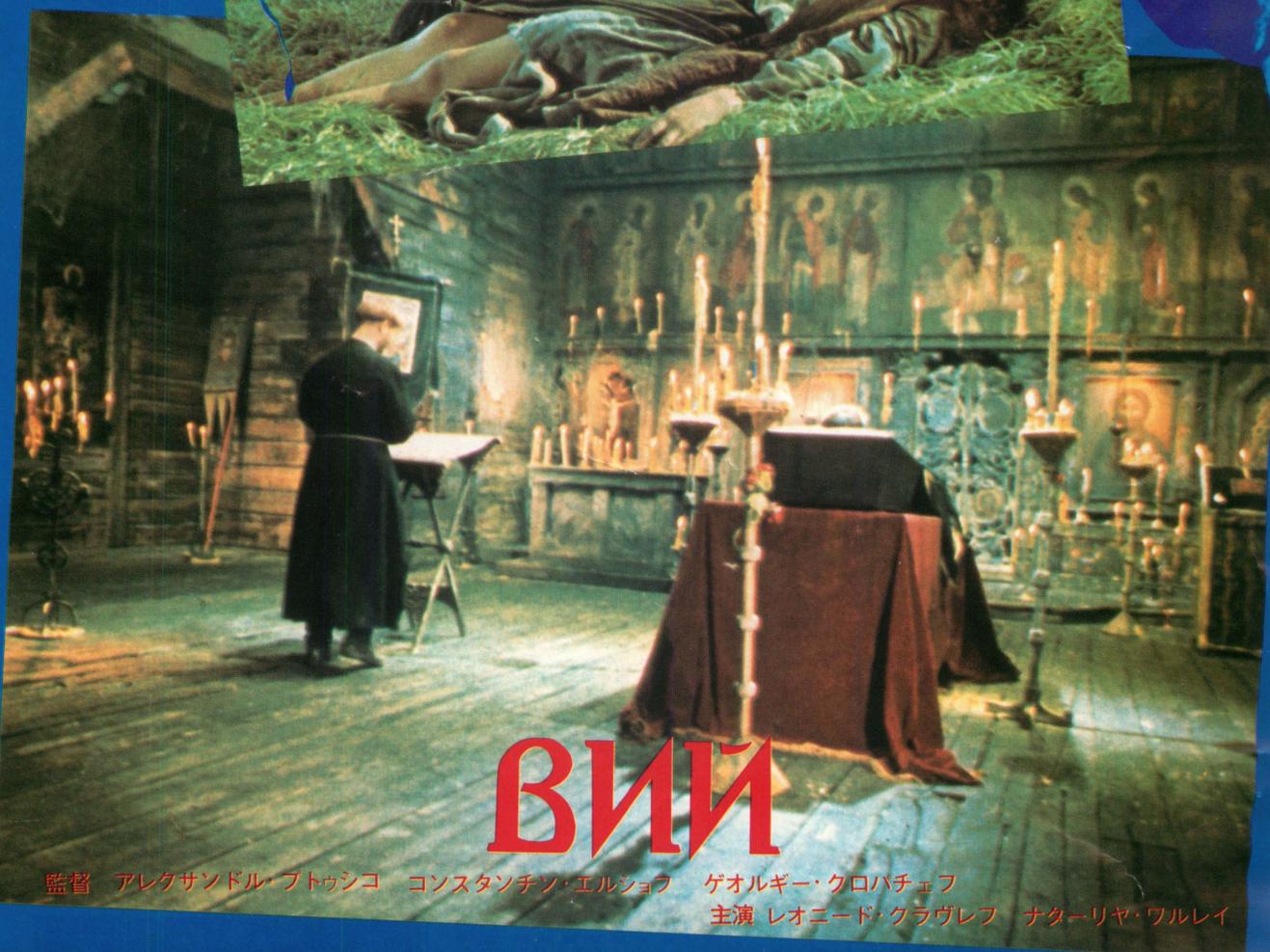
中世ロシア、
聖壇を侵す魔女と妖怪たち
——神学生ホマーの恐怖と激闘の三晩!

文豪ゴーゴリの伝奇roman「ヴィー」

日本海映画配給



モスフィルム製作



ВММ

監督 アレクサンドル・ブトウシコ コンスタンチン・エルショフ ゲオルギー・クロハチェフ
主演 レオニード・クラヴレフ ナターリヤ・ワルレイ

アンコール・ロードショー
4月12日(金)→20日(土)
4月14日(日)は休館

国電・地下鉄—お茶の水駅下車徒歩7分
アテネ・フランセ文化センター
Tel (03) 291-4339 (13:00~19:00)

鑑賞券 前売 1,100円
〈当日 1300円のところ〉
●入れ替え制●

開映	1:30	4:00	6:30
----	------	------	------

幻の怪作 ついにスクリーンに登場!

本格的妖怪映画であり、妖怪映画の傑作
水木しげる〈漫画家・妖怪研究者〉

美しい映像の底にただよう「性」!
鈴木 晶〈翻訳家〉

不気味な幻想の
「リアリスティックな」再現!
川端香男里〈ロシア文学者〉

格調とユーモアをあわせ持った正調怪談
森 卓也〈映画評論家〉



色彩・物語・すべて鮮烈な美!

山田宏一〈映画評論家〉

67年、ソ連。劇場未公開作品で、テレビではすでにすくなくとも二度は放映され、二度も見てしまったのだけれども、また見たい映画だ。色彩、特撮、物語、すべてが身の毛のよだつ美しさだ。おどろおどろしい題名どおりの恐怖映画なのだが、ただもうその鮮烈な美しさに魅惑されたという衝撃の記憶の残像が悪夢のようにいまなおまなましく脳裏に焼き付いている。ほうきを手にした妖しい老婆が突如神学生の体に馬乗りになり、そのまま草原を駆けぬけて空中に舞い上がる。夜な夜な、死霊をおいはらうために祈とうする神学生に、棺からがぼと起き上がって襲いかかる美女……。

監督のコンスタンチン・エルショフについてはなにもわからないが、ソビエトにもこんなすばらしい怪奇映画があったのかとびっくりさせられる。文豪ゴーゴリの民話的なロマンに彩られた妖怪物語「ヴィー」の映画化で、映画の原題もおそらくは同じ「ヴィー」。

●朝日新聞1979年7月6日夕刊(シネ・スポット)より

妖婆 死棺の呪い

ご好評にこたえて「妖婆 死棺の呪い」をアンコール・ロードショーいたします。

この映画は、1971年以来、過去数回にわたってTV放映され、その都度大きな反響を呼んできました。特に、SF・ホラー映画ファンの間では、リアリズムと幻想が交錯した魔不可思議な魅力を持つ映画として、伝説的に語りつがれてきました。

原作は、ロシアの文豪ゴーゴリの怪奇物語『ヴィー』(1833)で、恐怖と諧謔のないまじった作風は、「狂人日記」「鼻」とづく彼の猟奇的な作品群の中でも、ひときわ、異彩を放っています。

モスフィルムの監督高等課程の卒業製作であるこの映画は、処女作ならではの躍動感が全編にみなぎっています。特にクライマックスとなる教会の場面では、溢れるばかりの色彩と大胆・斬新な演出、カメラ・ワークの連続で、観るものを一気に耽美的な錯乱の世界へ導いてくれます。

世界映画史的に見ると、この年代は、アメリカン・ニュー・シネマの台頭して来る時期にあたります。ニュー・シネマの後に来たものが、ルーカス、スピルバーグといった活動大写真的真に映画の体験を旨とする作家たちであったことを考えると、1967年に製作されたこの「妖婆 死棺の呪い」の試みは、きわめて今日的なものであると言えるでしょう。



これまで、この作品はテレビといういわば日常的メディアを通して、映画ファンに認知されてきました。しかし、映画は本来、暗闇とスクリーンという非日常の中でこそ初めて完全な姿を現わすものです。ことに活動写真的感性に迫まろうとするこの映画では、スクリーンは絶対不可欠の条件であり、今、ようやく映画としての正当な復権をとげようとしているのです。



〈スタッフ〉

製作 モスフィルム 1967年
原作 ニコライ・ゴーゴリ 「ヴィー」
監修 アレクサンドル・プトゥシコ
監督 コンスタンチン・エルショフ
脚本 ゲオルギー・クロパチェフ
アレクサンドル・プトゥシコ
コンスタンチン・エルショフ
ゲオルギー・クロパチェフ
撮影 フォード・プロヴォーロフ
ウラジミール・ビシチャリニコフ
美術 N・マルキン
音楽 K・ハチャトリアン
指揮 E・ハチャトリアン
衣裳 R・サトウノフスカヤ

〈キャスト〉

ホマー レオニード・クラヴレフ
地主の娘 ナターリヤ・ワルレイ
地主(百人長) アレクセイ・グラズィリン
老婆(魔女) ニコライ・クトゥーゾフ
ハリヤーフ N・ザハルチェンコ
神学校長 P・ヴェスクリャロフ
ゴロベーツ V・サーニコフ
オヴェルコ D・カーブカ
ドーロシ P・ヴェスクリャロフ
ヤーフトゥク S・シクラト
スチュパン G・ソチェフコ
スピリード N・ヤコフチェンコ

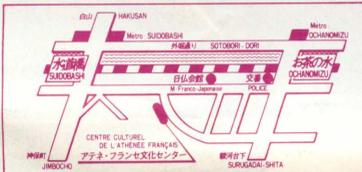
カラー / 上映時間78分

アンコール・ロードショー

4月12日金 → 20日土

4月14日(日)は休館

開映 1:30 4:00 6:30 ●入れ替え制●



前売 1100円 <当日 1300円>

国電・地下鉄—お茶の水駅下車徒歩7分

アテネ・フランセ文化センター

Tel (03) 291-4339 (13:00~19:00)

「妖婆 死棺の呪い」公開記念パンフレット——棺桶型に黒リボンの不吉なスタイル!——好評発売中!! 300円